

これからの猪猟

〈9回〉

田宮 治

サバイバル戦略

この年齢になると生き残りの戦いとなるのが現実で、何十年も親交を深めてきた山梨支部の松土氏や千葉支部の平野氏も体調を崩し

今年の猟はできなくなつた。まだまだだと思つて体調管理や猪犬軍団の調整に頑張つてきたが、やり遂げたいことや仕上げたい思いとは裏腹に、完璧なものではなくなつていく。

「これでは駄目だ」と必死で挑戦する気持ちはあるが、肝心の体が思うように動かない。どんなに頑張つても実戦の準備を完璧なものに仕上げられないのが、よる年波なのである。

今年も猛暑続きだったせい、学生時代の友人や姪の嫁ぎ先の舅様まで天国に旅立たれた。その寂

しさで追い打ちされ、大事な猪猟の準備ができないまま猟期に入つたのである。いつもの自信満々の状況とは違い、ちよつぴり不安の門出となつた。

会心の一撃

寂しい、辛い、苦しい中で、そのすべてをこの猟期に爆発させ開花させるために今まで頑張り通してきたのである。

初猟日は千葉が雨の予報だったので山梨での出猟となつた。自慢の猪犬軍団の働きと四人の猪猟人で二頭の猪を撃ち獲るといふ、不安をはねのける猟果だった。

今回発信したい会心の一戦とは、自分だけの力で押し出す単独猟であり、全力で実践する翌日十一月十六日の千葉での一戦である。支部長の平野氏の所に立ち寄

つて挨拶と入山の場所を知らせ、万一の時に備え「猪が獲れた時はよろしく」とお願いしていた。

昨日とは打つて変わり快晴無風である。千葉での初日の猟場を選んで場所とは、支部設立の時から数多くの猪を獲っている一番好きな得意としていた所である。一年ぶりに立つた猟場だったので、当然、猪跡の確認も見切りもしないぶつつけ本番であるが、知り尽くしている猟場なので問題ない。

この猟場は、昨猟期だけで仔牛ほどある大猪と四回対戦し全敗している悔しい思いが残っていた。その特大猪が残っているのだから、仔猪がぞっくりお出迎えるだろうと思つてのことでもあったので、感慨もひとしおである。

時刻は八時三十分。思つたより温かい。千葉特有の青藪で木々の葉もやつと色づく程度で、見通し

はずこぶる悪い。

パジェロから犬たちを山道脇のフェンス（金網）に繋いで、GPSを取り付け、入山して困らないように万全の用意をする。絶対に忘れものをしないように、声を出して一つひとつ確認する。「これでよし」と、この歳になると忘れ物がどうしてもあり、単独猟の場合には必ずやらなければならぬ大事な入山前の点検である。「さあ行くぞ！ ヨシ、シロ、マロ」

大猪に備えて、咬み止め、鳴き止め自在の名犬を車から綱なしで放す。いつもどおりの狩り込みで小峰伝いに山頂にある鉄塔を目指した。

犬たちは久しぶりの実戦なのに全く昨猟期と変わることなく、左下に広がる真竹藪を上にと下にかい潜り、小気味良く猪を探してい

る。

私は右側に広がる見通しの良い
檜木林の中をゆっくりゆっくり
と、GPSを見ながら犬たちの動
きに歩調を合わせる。いざという
時に素早く現場に寄り付けるよう
に、犬たちが五、六〇メートル前
方に位置を必ずキープする。さら
に、小峰伝いに攻め続けるのが肝
心である。

犬群は早くも猪臭を感じ取って
いるようで、離れ気味になってい
る。小峰の高い所から犬たちを左
下前方五〇〜七〇メートルくらいで追
いながら、目標の鉄塔まで登る。

タオルで汗を拭きながら、「よし、
ここからだ」と立ち止まった。
右下に広がる孟宗竹の藪は、
いつも猪が飛び出して来る要所
だ。すぐ下には番犬を三、四頭飼
っている民家がある。この場所で
飛び出した猪は、間違いなく孟宗
竹とその先の真竹藪を突っ走り、
突き当たりの大きく右に曲がって
いるこの小峰を越えて次に進もう
とする第二のポイントに向かうは
ずだ。

私は小走りで先回りして、上っ
て来る猪を静かに待ち構えていた
が、犬たちだけが凄いい勢いで上っ
て来た。「よしよし、来い来い」
と犬たちに声をかけるが、私をち
らっと見て確認しただけで、犬た
ちは一目散に小峰を越えて大杉林
に姿を消した。

「おかしいなあ、もう猪が早立ち
してここを越えたのかな……？」

そう思って犬たちが走り去った
所を見ると、何と三、四頭の猪が
昨夜通った足跡が一筋の道になっ
ている。それは新しいものから泥
足のもの、さらに小猪の跡まで残
っている。思ったとおり特大猪は
健在していた。

私はこれはただごとではないと
察知して、GPSで犬たちを確認
して大杉林を駆け下り、今日二番
目の良い猟場を目指して急いだ。

大杉林を一〇〇メートル下ると平
地になっている。その平地を突き
通すように続いている小峰筋を
一〇〇メートル登った右側に広が
る真竹藪と篠竹の大藪である。昨
日猟も大猪を何頭も撃ち獲った所
だ。

「よしよし、この方向なら必ず
猪軍団はあのポイントだ」と意気
込み、ぶっ飛んで大杉林を駆け抜
けて大峰筋の急坂をよじ登ろうと
した時、静けさを打ち破るよう
な、マロ号の恐しいまでの威嚇が
始まった。まるで猪との激戦の最
中にマロ号が得意とする吠え込み
ながら噛みまくる、あの戦闘の合
図である。

間髪入れずヨシ号もシロ号も狂
ったように吠え込んで、鋭い噛み
を連発している。これはただごと
ではない。どんな大猪でも一頭な
ら対策も覚悟もできたが、この鳴
き声はそんなものではない。七、
八〇メートルの猪が何頭も集結し
て犬たちと互角に戦っている。こ
のままでは犬たちが危ない。

GPSで確認すると、いつもの
止め現場のように犬たちが一団の
塊りとなって猪を止めているので
はなく、一頭一頭がばらばらで戦
っているようだ。

猪止め現場は大峰筋から六〇メ
ートル崖下の小沢を挟んだの攻防
だ。鳴き声からすると、犬たちは
猪軍団をまとめて止め置き、大峰

筋は越えさせまいとしている。

「よし、ジジがいま行くから
な」と大峰筋を登るのをやめて、
一気に危険な右側の斜面に走り込
んだ。鳴き声を頼りに飛び下り
て、二五〇メートル先の犬群を目
指した。時計の針の四時方向から
犬たちを右斜め上方に見る位置に
立ち、そこから必勝の布陣で攻め
抜く決断をした。

犬たちは猪群との激戦の最中だ
った。バリン、バリバリ、ドッド
ドドゥーッと、恐しい地響きであ
る。犬たちのワンワン、ギャンギ
ヤンの凄まじい攻めの連続音に対
し、猪はドッドッと地面を踏みし
め、負けじと反撃している。三、
四頭の猪がそれぞれグオーッグッ
グッ、グオーッブツブツ、ギイー
ッギイーッと鳴いている。マロ号
たちと猪が入り乱れての大乱闘で
あり、山中が割れるような大騒ぎ
である。

「よしよし、その調子だ」。俺が
この場に立ったからには、猪の
三、四頭は物の数ではない。犬た
ちが最高のチャンスを作ってくれ
たのだから、何としてもこの猪を



ヨシ号とシロ号が追い落とし、マロ号の吠え立てで急停止したその一瞬、眉間に見事一発で決めた80kgの母猪

撃ち獲つて、主人が強いことを犬たちに示さなければならぬ。

この願つてもないチャンスを私にプレゼントとしようと、犬群は「早く来いよ、ジジ」と、ますます元気に呼び続けている。その声は八〇ほど右上方の雑木林からだ。

ここから勝負どころとなるが、普通に考えれば、並の犬群二、三頭で三、四頭の猪を止めたとしても、その勝負はあつという間に決する。素晴らしいチャンス

と思うのは束の間であり、猪が八方に逃げるのを犬たちがばらばらになって追うので止め置くことなどできない。つまり「はい、それまで」ということで、逃げられて終わるのである。

だが、絶対にそんなことはさせぬのか！と、まさに勝負の分岐点に立って攻め立てる筋道と犬たちの行動を見渡して見るが、激戦の修羅場は雑木の大きな葉が落ちていないことと、青木と下草藪のため全く見えない。

「さあ、行くぞ！」と自分に檄を入れ、「さあ、来てみろ！」と、猪が飛び下りて来たら一発で撃ち倒す態勢で銃を持ち構え、一歩また一歩と、岩場を確認して慎重に寄り付いて行く。だが思いのほか山容が険しく大変である。その上、休みなしの寄り付きだったので、闘志を取り戻すために一度小休止をした。そこは下の大沢に続く、水のない一〇メートルの小谷が始まる所である。

突き抜けていて進めないV字の小谷を目前にして、さて、どうしたものかと思案していると、犬たちが私の接近に気付いたようで、その鳴き声が微妙に変化している。前よりも静かな声で、マロ号は私の目の前三〇メートルの小谷の上に広がる窪地から上方に向かって寄せ鳴きをし、大きくラウンドをかけているようだ。山の上方からはヨシ号とシロ号が下に向かって小声で吠えている。

茂みで犬たちも猪も全く見えませんが、どうも犬たちの囲いの中には、二、三頭の猪が追い込まれているようだ。

ところが、猪の反撃音が全くない。すぐ近くだというのに、小谷の始まる山平の窪地は危険すぎて登れない。V字谷の縁をどきどきしながら、細心の注意を払って少しずつ猪止め現場に寄り付いて行く。猪止め犬群による「猪群さばき」は、このあたりの寄り付き方によって結果が決する。

現実に、もし足音を立てて姿丸出して不用心の寄り付きなら、猪はあつという間に犬たちの囲いを突破して、攻め寄る私とは反対方向にバラバラに逃げてしまう。

これまでの実戦経験から、いま反対方向に逃げられたら猪の姿さえ見ることができない。まして単独狼なので、先にタツもいなければ回り込みなどもかけられない。つまり、犬たちが頑張つて作った最高のチャンスも、攻め方次第で一瞬にして無駄になるのである。

そんな状況下で、私が四時方向からV字谷の縁を慎重にソロソロリと寄り付いているのは、何とか犬たちの囲いの中の猪をより早く発見して、少し遠くからでも必殺の一撃を素早く送り込むため

ある。さらに、私の自慢の犬たちが止めているのだから、大峰筋は絶対越えさせてはならない。

猪群であろうと、この犬芸なら必ず止め現場からこの窪地に追い落とし、V字谷伝いに見事な谷落としになるだろう。本音を言えばそんなところである。

だが、勝負というものは、猪に止めを刺すまでは気は抜けない。万策を考えながら、横倒しになった杉の丸太をそと乗り越えようとした時、マロ号が迎えに来る姿が見えた。

マロ号はすぐ戻り、窪地からまたその先の青木と笹藪に向かって吠え立てている。いつでも撃ち込める態勢で四、五本の小杉の下をくぐり抜けた時、まるで私を見てとったようにヨシ号の凄いい鳴き声が響き渡った。当然のようにシロ号も大声で続く。

ウウーッ、ワンワンと同時にバリリン、バリバリ、ドッドドドゥーッと、地響きを立てながら猪が飛び下りて来た。窪地越しに私から二五メートルくらいで、下から吠え立てたマロ号の前で猪が落ち葉と土を

巻き上げて急停止した。その一瞬、きつちり眉間を狙って会心の一撃を送り込んだのである。

山々に響く轟音一発。猪はぶっ飛んでマロ号の前に崩れ落ちた。マロ号はすかさず思い切り猪に噛み付いている。上方ではヨシ号とシロ号がまだいる猪とバリバリと大騒ぎである。

銃声とマロ号の吠え立てに驚いた猪は私が思っている同じ場所には落ちて来ず、すぐ上を三頭ぐらゐの猪が横に逸れて大峰筋を越えて逃げて行った。もう少しヨシ号とシロ号が頑張つて猪を追い落とすしていれば、全く同じ結果が出たであろう。だが、先頭を切つて飛び下りて来た親猪が悲鳴を上げてやられたのでは、それに続いて落ちて来るわけもなく、仕方ないことである。

ヨシ号とシロ号は大峰筋まで追いつきで猪を追って行ったが、間もなく飛び下りて来て嬉しそうに撃ち獲った猪を噛み込んでいます。私は流れ出る汗をタオルで拭き、ボトルの水をガブ飲みしどっかりと腰を下ろしていた。

「お前たちよくやったなあ……、こんな悪い場所所で上出来、上出来。よしよし」と、何度も何度も頭を撫でながら褒めてやった。

「ほら、食べろよ」といつものジャム入りコッペパンを与えるが、闘志を爆発させて猪を噛むのをやめないで、気が済むまで好きにさせておいた。私はほっとして腰を下ろしミカンとパンを食べて栄養ドリンクをグイ飲みした。

そして記念の写真を撮り始めるとマロ号がいけないことに気付いた。「マロ！ 来い、来い！」と大声で呼ぶが姿が見えない。マロ号は撃ち獲った猪に止めを刺すように大喜びで噛み付いていたが、友犬たちヨシ号とシロ号の急を知らせる追いつき鳴きにせき立てられ、上方のヨシ号とシロ号を目掛けて吹っ飛んで行ったのだ。逃げる猪を得意の追跡（鳴かないで猪に追いつき、止め切ると改めて止め鳴きとなり、撃ち獲るまで鳴き通す）で、二頭目を獲りに出たに違いない。

マロ号は猪を追い出したら、まるで誘導弾のようなものだ。力の

続く限り私さえ付いて行けばどこまでも追って行って必ず止め置き、素晴らしい鳴き声で大きくラウンドして止め撃ちをさせてくれる。

「それにしても困ったなあ、今日はこれで十分。初戦なので早上がりしよう」と思っていたのに。

だが、マロ号があつた逃げた猪を追っているのでは、のんきに勝利の味をむさぼって満足している場合ではない。マロ号が食欲に猪を追い続けている以上、激戦は続行中なのだ。

私はヨシ号とシロ号に「お前たちも早くマロの所に駆けつけてやらないと駄目だ」と話しかけ、猪から引き離そうとするが、ヨシ号もシロ号も猪を噛むのに夢中になっている。「ほらほら、早く行こう。来い、来い、来い！ お前たち、早く行ってやらないといくらマロが一流芸であっても、三頭相手じゃ大変だ。マロの所に行くぞ！」と、ヨシ号とシロ号に急いで引き綱を取り付け、猪が越えた大峰筋を目指して登り始めた。

(つづく)